

# 集女 苦木 あり



小川 洋子

もう自分は若者ではないのだなあ、という当りの前の事実を、しみじみかみ締めることが最近増えてきた。

本を取りに二階へ上がり、日が暮れてきたのに気づいてカーテンを閉め、そのまま下りてくる。「あ、本」と思いつき出さずまでに十五分くらいかかる。顔をこすると、正体不明の白い粉がはらはら落ちてくる。『ブルウエイの森』を再読し、縁や直子ではなく、皺の多い中年女性レイコさんに感情移入している自分を発見する。足の小指の爪がどんどん小さくなっている。生協の配達的青年に、「車の運転気をつけてね」と毎回声を掛けてしまう。



しかし何より一番困るのは、集中力の欠如である。小説を書けば書くほど、どっしり落ちていくまじろに思われるのに、なぜか正反対で、原稿の前に座るのが年々苦痛になっている。数行書いては立ち上がり、部屋を周回し、また数行書いては周回する。低下するばかりの代謝に抵抗するかのごとく、無意味にころころしている。

当然、仕事の効率は落ち

若い頃ならば一日で書いた原稿が、三日も四日もかかるようになる。長編小説にいたっては、一体いつになったら完成するのか想像もつかない。

こんな調子では、とても間に合わない。自分にはもう長編小説など書けおしがない。仕事の途中、何度もそう思う。



ところがなぜだろう。不思議なことに、締切には間に合うのである。ぎりぎりの綱渡りではあるものの、どうにか人様に迷惑をかけないところに、納まるのである。

到底だどりで着けないと思っていた小説の最後の地点に、自分が立っていると気づいた時のあの気持ちは、不思議としか言いようがない。思わず「あれっ」と舌を濡らし、本当にこれを自分が全部書いたとは信じられず、あたりをきよるきよる戻回している。書いたという記憶は薄ぼんやりしてはつきりせず、ただ部屋を周回した美感が残っているに過ぎないのだ。

「誰かが手助けしてくれたんだらうか」

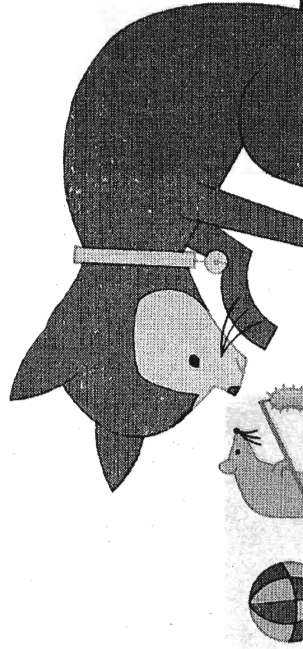
と、私はつぶやいてみる。自分の声を聞かれたら、もうその誰かはやって来てくれな

## オクナイサマが手伝ってくれるから大丈夫

いかもしれない、という勝手な思い込みから、声にならない声でこっそりつぶやく。



『選野物語』の中に、オクナイサマと呼ばれる神様が田植を手伝ってくれるお話がある。田植えの人手が不足に困っているど、どこからと



學子

もなく現れた背の低い小僧が、ご飯も食べずに一日働き、日暮れとともに去ってゆく。家に帰ると、縁側に小さな足跡があり、座敷に祀られたオクナイサマの神像の腰から下が泥にまみれていた。自分にもオクナイサマがい

るに違いない。私が落ち着きなく部屋をうろろしている間、代わりにオクナイサマがパソコンの前に座り、キーボードを打って下さった。その小さな指で、カタ、カタ、カタ、と……。

オクナイサマに出会えるのなら、若者でなくなるのも別に悪いことではない。歳を取

るのは決して不幸ではない。

父は晩年、痴呆が進み、私が娘であるのも分からなくなった。看護師さんに「この人誰か分かる？」と聞かれ、父は恥ずかしそうに「妹です」と答えた。

何の用事で二階へ上がったか忘れ、小指の爪は変形し、顔は白い粉をふいている娘なのだから、その父親が痴呆になってもしょうがないじゃないか。すぐには順番とおりだ。自分のことより、常に子や孫の心配ばかりしてきた父が、ここ

でようやくその心配から解放されたのだ。これは喜ばしいことなのだ。弟はたくさんい

るけれど、妹は一人もいないから、一度妹というものを持つてみたかったのかもしれない。それならば、私が妹になる。お安い御用だ。そう、自分に言い聞かせた。

丁度その時、私は出版されたばかりの新しい本を持って

いた。「……を……いて……と……ぐ」

父は本を手に取り、タイトルの平仮名だけを読み上げ、それからパラパラとページをめくった。



「この本、私が書いたのよ」と言うと、父はびっくりして顔を上げた。

「これ、全部？」

「うん、そう」

「えっ……」

しばらく絶句したあと、本を握ったまま父はぼつんと言った。

「こんなに書いたら、死んでしまっ」

娘のことは忘れたのに、娘を心配する心だけは忘れていなかったらしい。やはり生きていくかぎり、心配のない国へ行くのは難しいのだろう。

「大丈夫よ」

私は父の背中を撫でた。

「オクナイサマに手伝ってもらったから」

それでも、いつまでも父は娘の書いた本の表紙を見つめていた。

(おがわ・よつこ「作家」)

＝毎月一回掲載します